

## 五社大明神

五社大明神は、本殿の裏にある赤と黒に塗装された広い木造の神社です。本殿の建設を監督した林正清（1678～1753年）の息子、林正信（1736～1802年）が、本殿と同時期に建立したと考えられています。後に火災で崩壊してしまいましたが、1783年に再建されています。塗装については、2009年に復元されています。国の登録有形文化財に指定されています。

左右の切妻には、懸魚の彫刻が装飾されています。花のモチーフで、赤色に細部は黒色で仕上げられています。懸魚は、神社仏閣で一般的に見られる特徴で、初期のものだと火災から家を守るものとして魚型のものが多く見られます。江戸時代（1603～1867年）より、花や鳥などのデザインも見られるようになりました。